

令和元年6月10日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02868

研究課題名(和文) 英語ドラマ制作活動が学習者の情意面に与える効果の実証研究

研究課題名(英文) The Motivational Effects of a Project-based Film-making Activity

研究代表者

吉村 征洋 (Yoshimura, Masahiro)

摂南大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90524471

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果としては、英語によるドラマ制作活動を協同学習的観点から考察し、学習者の情意面に与える影響を検証した結果、学習者の英語学習への動機づけ向上に一定の効果があったことが挙げられる。Yoshimura, Hiromori, Kirimura, & Nishina (2017)では、学習者の動機を高める協同学習の構成要素が学習者の特性により異なる可能性があることを指摘した。吉村、廣森、桐村、仁科(2019)では、協同学習における8原理と英語学習への動機づけの関連性を検証し、8原理が日本人EFL学習者の英語学習への興味と態度に強く影響を及ぼしていたことを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、協同学習としての英語による映画制作活動(FMA)が、学習者の英語学習に対する動機づけに一定の効果があることが明らかとなった。こうした効果が数値化され、ドラマ制作活動による英語学習法が、学習者の第二言語習得の情意面において有益であることを実証的に明示することができたことは、日本の英語教育に新たな視座を提示することができたと考える。今後、文部科学省(2017)が推進するアクティブ・ラーニングを実施するための一つの方法として、様々な教育現場でFMAが導入されることを期待する。

研究成果の概要(英文)：This study examines the motivational effects of a project-based film-making activity (FMA) through cooperative learning (CL). We conducted a post-questionnaire survey of CL and attitudes toward English learning to assess the effect of the project on motivation. The journals that the students wrote during the project were also analyzed by the method of content analysis. Yoshimura, Hiromori, Kirimura, and Nishina (2017) found out that FMA with CL had a significant positive impact on students' motivation and attitudes towards English learning, while the functions of CL that enhance EFL learners' motivation might differ corresponding to the characteristics of learners. In addition, Yoshimura et al. (2019) showed that the principles of CL in FMA strongly influenced interests and attitudes toward learning English.

研究分野：イギリス演劇、映画制作活動

キーワード：映画制作活動 動機づけ 協同学習 PBL アクティブラーニング

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

2014年、文部科学省は「英語ができる日本人」を育成するために、小中高を中心にグローバル化に対応した英語教育改革の方策を公表した。児童生徒のコミュニケーション能力を育成し、高等学校卒業時に、生涯にわたり4技能を積極的に使える英語力を身につけることを目指している(文部科学省、2014)。一方で、日本のようなEFLの環境では、限られた学習時間の中で、コミュニケーション能力や英語の4技能を伸ばすことは容易ではない。その上、寺沢は『「日本人と英語」の社会学』(研究社、2015)において、グローバル時代にありながら、英語を積極的に学習していきたいと考えている日本人は、日本人全体の約3.1%しかいないことを指摘している。研究開始当初のこのような現状を鑑みると、学校現場では学習者の英語学習への動機づけを高めながら、英語の4技能やコミュニケーション力を伸ばすような英語学習法の開発が求められていた。

### 2. 研究の目的

学習者の動機を高めながら、英語の4技能やコミュニケーション能力を伸ばす学習法として、「英語のドラマ制作活動による英語学習法」を考案した。学習者はクラスメイトとの協同作業により、一定の期間でドラマ作品を作成する。英語による台本作りから始まり、台本の読解や聴取、さらにドラマ撮影のために、設定された場面や状況を想定しながら演技や感情を込めて台詞を発する。学習者にとっては他者を演じながら、繰り返し同じ台詞をインプット・アウトプットするので、質の高いインプット・アウトプット活動に繋がる。EFL環境では、学習者が自分1人だけで感情を込めたインプット・アウトプット活動を行う機会が少ないため、ドラマ制作活動を通じて、チームメイトと協同で質の高いインプット・アウトプット活動を行うことにより、学習者の英語学習への動機を高めることが予想された。

### 3. 研究の方法

本研究方法は、以下の4段階から構成された。

- (1) 準備段階：ドラマ制作活動に使用可能なドラマ作品のリストを作成する。リストの中から、学習者のニーズやレベルを考慮して、台本作成に適切なドラマ作品の選定を行う。
- (2) 開発段階：ドラマ制作活動を効率的に進めるためのドラマ制作用教材を開発する。また学習者の情意面への効果を測定するために質問紙調査票を開発する。
- (3) 実践段階：(2)で開発した教材(台本)を授業実践の場で用いながら、特に学習者の情意的側面における効果を実証的に分析し、その効果を数値化する。
- (4) 報告段階：(1)(2)(3)で得られた研究成果を学会発表や学術論文を通じて、公表する。

#### (1) 平成28年度の研究手法

平成28年度は、以下の2つの段階(準備段階・開発段階)に分けて、学習者の嗜好を意識したドラマ作品を選定し、それらをリスト化した。その後、学習者の英語力を考慮しながらドラマ作品の選定およびドラマ制作用教材の開発を行い、学習者が質の高いインプット・アウトプット活動を実施できるようにした。また、学習者の情意面への効果を検証するための質問紙調査票を開発した。

#### 【準備段階】

ドラマ作品のリスト化：

国内外のドラマ作品や日本で人気のある映画作品のGraded Readersを参照しながら、良質な会話を包含する作品に加えて、状況設定などにおいて、現実的にドラマ制作活動が可能な作品をリスト化した。また、学習者が幅広い作品群から英語力や嗜好に合わせて作品を選定できるように、数多くの作品のリスト化し、そのリストの妥当性を検証した。

#### 【開発段階】

ドラマ制作用マニュアルの作成：

準備段階で精選したドラマ作品のリストを活用し、学習者の興味・関心を引き付けながら、効率的にドラマ制作活動を遂行できるように、ドラマ制作用マニュアルを開発した。準備段階で作成したドラマ作品のリストに加えて、ドラマ作品の概要などを掲載し、学習者が幅広い選択肢の中からドラマ制作するための作品を選定できるようなマニュアルにした。また、学習者が英語によるアウトプットを効果的に実施できるように、英語の発音・発声方法に触れた上で、感情を込めたアウトプットができるように基本的な演技・演出方法(例：スタニフラスキーシステム)も掲載した。さらに、ICTを効果的に活用するために、ビデオカメラ等を用いた動画撮影方法とPC(Windows版とMac版両方)の動画編集ソフトを利用した動画編集方法を記載した。

質問紙調査票の作成：

英語によるドラマ制作活動が、学習者に齎す効果を実証研究するための質問紙調査票を開発・作成した。質問紙調査は、学習者がドラマ制作活動を行う前後(プレ・ポスト)に実施した。

質問紙調査票の質問項目については、「英語学習への動機づけ」「英語に対する情意面の変化」「チームメイトとの協同学習」「ICTを活用した英語学習への関心」等が中心となった。なお、質問紙調査票の質問項目に関しては、適宜必要な修正を加えながら、学習者のデータを精緻に収集するために改善した。質問紙調査では測れないような個別事例に関することは、学生がプロジェクト実施中に執筆したジャーナルを参照した。

#### (2) 平成 29 年度の研究方法

平成 29 年度には、研究代表者や研究分担者の勤務する大学を中心にして、【開発段階】で作成したドラマ制作用マニュアルを使用して、ドラマ制作の対象となる作品を選定後、学習者はクラスメイトとの協同作業や教員のサポートを得ながら、英語によるドラマ制作活動を行った(実践段階)。学習者には、ドラマ制作活動前後にアンケート調査やインタビュー調査を実施して、プレ・ポストで比較検証を行い、学習者の動機づけに与える効果を多角的に検証した。教育的な配慮から、実験群・統制群を設けた調査ではなく、プレ・ポストでの変化を比較・検討する手法を用いることによって、ドラマ制作活動の授業実践による教育的効果を検証した。こうして得られた情報を統計的に考察することで、英語によるドラマ制作活動を英語教育に用いることが、学習者に及ぼす効果を実証研究できたと考える。

#### (3) 平成 30 年度の研究方法

平成 30 年度は、本研究課題の総括を行った(報告段階)。これまでに得られた研究成果を国内外問わず広く公開・共有し、英語によるドラマ制作活動という新たな視点からの英語教育・学習法を提示することで、大学英語教育の高度化・活性化の推進を図った。

### 4. 研究成果

本研究の成果として、ドラマ制作活動を協同学習の観点から考察し、学習者の情意面に与える影響を検証した結果、学習者の英語学習への動機づけ向上に一定の効果があつたことが挙げられる。

Yoshimura, Hiromori, Kirimura, & Nishina (2017)では、協同学習による FMA が日本人学習者の英語学習への動機づけ向上に一定の効果があつたことを明らかにした。FMA に対する満足度が高かったグループ(G1)と満足度がやや低かったグループ(G2)の存在を明らかにし、学習者の動機を高める協同学習の構成要素が学習者の特性により異なる可能性があることを指摘した。

吉村、廣森、桐村、仁科(2019)では、Jacobs, Power, & Loh (2002)が提唱した協同学習における 8 原理と英語学習への動機づけの関連性を検証し、Film-making Activity (FMA)のようなプロジェクト型学習において、8 原理が日本人 EFL 学習者の英語学習への興味と態度に強く影響を及ぼしていたことを指摘し、8 原理の中でも特に“Individual Accountability”と“Positive Interdependence”がプロジェクト型の活動を成功に導く重要な原理であることがわかった。また協同学習を遂行する上で、cooperation だけに留まらず、competitiveness が重要な要素となる可能性があることが指摘された。その一方で、日本人 EFL 学習者が協同学習を行うときに“Heterogeneous Grouping”はそれほど重要ではないことが判明した。

本研究では、少人数授業(ゼミナール)において FMA によるプロジェクト型協同学習を実施したが、今後は異なる設定(例えば、40 人程度の英語授業)での検証が必要となる。一般の英語授業では、FMA のようなプロジェクト型学習を長期間実施することが困難なため、FMA の汎用性を高めるためには、2~3 週間程度で完結できるような簡略版での FMA の実施方法を考察する必要がある。さらに今回の研究で、競争意識が協同学習を実施する上で重要な要素となり得ることが明らかになったが、協同学習をより効果的にするためには学習者がどの程度、競争意識を持つ必要があるのかを検討する必要がある。またグループ内での競争意識と他チームに対する競争意識の関係等についても、学生ジャーナルの文言分析に加えて、質問紙調査などによって量的にも検証していく必要があるだろう。

#### <引用文献>

吉村征洋、廣森友人、桐村亮、仁科恭徳「英語ドラマ制作によるプロジェクト型協同学習が学習者の心理的側面に与える影響」*JACET Kansai Journal*, 21、2019、23-44

Masahiro Yoshimura, Tomohito Hiromori, Ryo Kirimura, and Yasunori Nishina. Motivating EFL students through the use of project-based cooperative learning. *ThaiTESOL Journal*, 30 (1), 2017, 41-57

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 2 件)

吉村征洋、廣森友人、桐村亮、仁科恭徳「英語ドラマ制作によるプロジェクト型協同学習が学習者の心理的側面に与える影響」*JACET Kansai Journal*, 21、2019、23-44

Masahiro Yoshimura, Tomohito Hiromori, Ryo Kirimura, and Yasunori Nishina.

Motivating EFL students through the use of project-based cooperative learning.  
*ThaiTESOL Journal*, 30 (1), 2017, 41-57

〔学会発表〕(計10件)

Masahiro Yoshimura, Ryo Kirimura, Yasunori Nishina, Tomohito Hiromori, “Motivating EFL students with project-based film-making activity: The cooperative learning theory viewpoint”, American Association for Applied Linguistics, AAAL 2019, 2019.

Masahiro Yoshimura, “The Motivational Effects of Project-based Film-making Activity in Japanese University”, The 17th Hawaii International Conference on Education, 2019.

仁科恭徳、吉村征洋、藤原康弘、廣森友人、鎌倉義士、桐村亮、吉川祐介 「映画を使う、映画を創る：学生の理解を深めモチベーションを高めるための英語授業の新展開」 JACET 関西支部大会企画シンポジウム, 2018.

吉村征洋、廣森友人、桐村亮、仁科恭徳 「英語によるドラマ制作を通じたプロジェクト型協同学習が学習者の心理的側面に与える影響」 第57回 JACET 国際大会, 2018.

Masahiro Yoshimura, Ryo Kirimura, Tomohito Hiromori, Yasunori Nishina, “The Motivational Effects of Project-based Film-making Activity through Cooperative Learning in Japanese University”, 10th ICLICE, 2018.

Ryo Kirimura, Masahiro Yoshimura, Tomohito Hiromori, Yasunori Nishina, “Smartphone Fiming as a Motivational Output Activity in a Large-sized EFL Class”, The 1st International Asean-English Language Teaching Conference (ASEAN-ELT 2018), 2018.

吉村征洋、仁科恭徳、桐村亮 「動画作成を取り入れた英語授業-実践報告と動画編集デモ-(企画ワークショップ)」、第15回 ATEM(映画英語教育学会)西日本支部大会、2018.

Masahiro Yoshimura, Yasunori Nishina, Ryo Kirimura, Tomohito Hiromori, “Seeking a better way to motivate Japanese learners of English through cooperative learning”, The 18th World Congress of Applied Linguistics (AILA2017), 2017.

Masahiro Yoshimura, Tomohito Hiromori, Ryo Kirimura, Yasunori Nishina, “Motivating EFL students through the use of project-based cooperative learning”, The 37th Thailand TESOL, 2017.

Masahiro Yoshimura, Tomohito Hiromori, Ryo Kirimura, Yasunori Nishina, “The Effect of Cooperative Learning on EFL Learners' Motivation”, The 14th Asia TEFL and 11th FEELTA International Conference, 2016.

## 6 . 研究組織

(1) 研究分担者：桐村 亮  
ローマ字氏名：( KIRIMURA, Ryo )  
所属研究機関名：立命館大学  
部局名：経済学部  
職名：准教授  
研究者番号 ( 40584090 )

研究分担者：廣森 友人  
ローマ字氏名：( HIROMORI, Tomohito )  
所属研究機関名：明治大学  
部局名：国際日本学部  
職名：教授  
研究者番号 ( 30448378 )

研究分担者：仁科 恭徳  
ローマ字氏名：( NISHINA, Yasunori )  
所属研究機関名：神戸学院大学  
部局名：グローバル・コミュニケーション学部  
職名：准教授

研究者番号 ( 00572778 )

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。